

## 華族論

園田英弘

華族は、明治の政治と社会が抱え込んだ矛盾の結節点に誕生した。それは、世襲の特権をどのように見なすかという問題と、深くかわりを持っている。周知のように、明治維新政府は武士の身分的特権を廃止し、四民平等の社会を作った。その明治政府が、日本の貴族である華族を形成したのである。そこには、特別の理由がなくてはならない。

フランス革命以降、西欧において貴族は社会に深く根を張った自然的生成物ではもうなかった。しかしながら同時に、貴族は過去のたんなる遺物ではまだなかった。それは政治的作為を加えても、貴族を維持したり新たに創り出すような存在であった。ヨーロッパで貴族廃止令がなんども出されているにもかかわらず、貴族が復活するのはなぜなのか。このことは、明治政府の担当者の頭を悩ました。貴族のこのような過渡期的性格を一方で念頭に入れつつ、他方で日

本の現実を直視したところに生まれたのが、高度に政治的人工物である華族という政治的身分であった。それは、社会的実力を国家が承認する貴族ではなく、国家権力によって人為的に創り出された社会階級ということを意味していた。

日本の現実とはなにか。私はかつて明治前期を、「社会階層秩序の空白期」と位置付けた。<sup>(1)</sup> 天皇を中心とする政治体制が確立されてくるにしたがって、それを支える階層的秩序の形成が要請されてきたのであるが、それがどのようなものであるかだれにも明白ではなかったのである。しかし、そこには暗黙の前提があった。天皇という政治的中心の存在である。天皇の地位とは、一種の世襲的特権である。それを支えるのに、たんなる四民平等の社会原則だけで旨くやっていけるのかどうか。このような課題を解くために試行錯誤しているうちに、次第に浮上してきたのが華族の存在である。

以下では華族の形成過程の全体的性格を明らかにするために、華族の社会的存在理由を二つに分けて論じてみたい。第一は、華族の存在それ自体が、一定の政治的・社会的役割を果たすと想定されている場合である。この立場に立てば、華族が具体的になにをなすかということとは、二義的な意味しか持たなくなってくるであろう。普通よくいわれる華族は「皇室の藩屏」という指摘は、本質的には、このような華族の存在それ自体を重視したものである。

第二は、華族の存在それ自体ではなく、華族がなすなものか、その社会的存在理由として重要だとする立場である。従来は、華族論としてこのような立場は余り重視されてこなかったが、ここではこの立場の華族論を職分論的華族論として、論じることにはしたい。改まってしまうまでもないことだが、「皇室の藩屏」論と職分論的華族論は、分ちがたく結び付いている。一人の論者の中にも、両者の立場がしばしば同居している場合があるのである。しかしながら分析的には、この両者を分ち、その論理の筋目を追うことが、華族の理解にとっては重要なのである。

## (一)「皇室の藩屏」論

華族はその存在理由として、「皇室の藩屏」を任務とするといわれてきたが、それは具体的にはどのようなことを意味しているのだろうか。

夫レ華族ハ皇室ト唇齒ノ勢ヲ為ス者ナリ。華族亡ビルトキハ皇族寒シ。皇族寒キトキハ万世一系ノ皇統モ随テ孤立ノ姿トナリ、斯国ヲ永遠安穩ニ維持スベキ見込ヲ失フノ恐レナキヲ得ス。<sup>(2)</sup>

この『朝野新聞』の投書欄に掲載された、典型的な「皇室の藩屏」論は、華族が果たすべき具体的な役割についてなんの言及もなされていない点に、注意してもらいたい。ここでは、皇室と皇族と華族が一体不可分のものと見なされている。この三者は一体であるからこそ、その一部である「華族」が「亡ビル」時には、「皇族」も危機に陥り、その危機は「皇室」にも及ぶことになり、ついには「万世一系ノ皇統」も「孤立ノ姿」になってしまふ。そしてこのような事態は、日本の「安穩」にとって大きな障害になってしまふとされるのである。

「万世一系ノ皇統」が「孤立ノ姿」になれば、なぜ日本の「安穩」にとっての障害になるのか。この意見では、これに対する直接的な回答はなされていない。ただあるのは、「皇室ノ為ニ必要ナル藩屏」が「毀損」される恐れがあるからいけないのだとする観点である。

華族はここでは皇室にとって必要な「藩屏」であるが、「藩屏」といい「墻壁」といい、それらはなんの、なにに対する防波堤なのか。この点については、後ほど触れることにしよう。この意見書に対する反論は、「藩屏」となり得るのがなぜ「華族」だけなのかということにあった。

抑モ足下ハ何ナル明理アリテ、特リ華族ヲ以テ、皇家ノタメニ  
必要ナル墻壁也トスルヤ。皇家ヲ擁護シ斯国ヲ安穩ニ維持スル  
者ハ豈独リ華族ノミナランヤ。<sup>(3)</sup>

皇室の「墻壁」となつて、国の安泰に貢献するのはひとり華族だけではない。この日本に生まれて「皇祖の恩沢」を受けた者は、すべてが「皇統」の安からんことを願うのだと主張するのである。政治的中心としての天皇の重要性の認識については、華族擁護論も華族否定論もともに一致していた。異なるのは華族の擁護論が、皇室・皇族・華族の一体化を前提としていたとすれば、それに対する反対論は、皇室と人民一般の一体化論とでも呼び得るものであった点にあった。

抑モ皇族ナルモノハ、皇家ノ血属ニシテ、苟クモ君主政体ノ国ニ於テハ、何レモ存立アラザルハナシ。又其人民ニ於テ是ヲ養護スベキノ義務ヲ負担スルモノニシテ、決シテ是ヲ拒ムノ權ナキモノナリ。嗚呼皇族ノ堅牢ナルスノ如シ。何ゾ他ニ寄テ其墻壁ヲ借ヲ要センヤ。<sup>(4)</sup>

皇室・皇族を支えるのは、「人民」全体ですべきものである。したがって、「皇室」と「人民」の間に「墻壁」を作る必要を認めず、皇室にとって必要な「墻壁」と考えられていた華族も、ここでは当然不要になってくるのである。「華族ノ墻壁ハ却テ皇族ニ損害ヲ来ス」とされた。

そもそも、華族が天皇を守るための「墻壁」となるのはなにに対してか。それは人民一般に対してである。言い換えれば、「人民」から「皇室」を守るという発想が当然のことながら「皇室の藩屏」論にはある。民衆に対する不信感であり、愚民感である。この不信感を前提にして、華族はその存在そのものが「墻壁」であり、また存在していることによって「皇室」を「孤立ノ姿」にしないという、重要な社会的役割を果たすことになるのである。それは能動的な不信感というよりは、受動的な不信感・愚民感というべきであろう。華族に、民衆と積極的に戦う役割を期待しているわけではないからである。天皇は政治的中心という地位に位し、しかもそれは世襲の権力・權威である。華族に期待されたのはこのような天皇の存在状況の特異性を緩和し、同類として天皇を「孤立」させないことであつた。

逆に、華族を否定している「墻壁」否定論は、「皇室の藩屏」論以上に皇室の役割を強調したところに成立している点に注目しなければならぬ。いわゆる一君万民主義的な思想である。国政の中心的な立場に立つと想定されている天皇（一君）と、民衆（万民）とが強く結合しているために、中間的な存在者（華族）を認めないとするのが、「皇室の藩屏」論否定の論理であつた。板垣退助は『一代華族論』の中で、世襲の貴族制度である華族制度は、一君万民主義に対する裏切りであると主張した。<sup>(5)</sup>しかし、世襲ではない「一

代」限りの貴族制度であつたとしても、「人民」に一般人民と一代華族という區別を付けるという意味では、一君万民主義的な平等主義の理想から離れていたとしなければならぬであらう。このようなポピュリズム的な一君万民主義は自由民権運動の高揚期とともに、大半はその姿を消したのである。後に残つたのは、民衆不信感に裏打ちされた、「牆壁」論であつた。

凡ソ国ニ貴族名門ノアルハ、即旧国タルノ証徴ナリ。蓋シ其制タル、數百千年馴致スル所ノ勢ニシテ、一朝一夕ノ能ク新作スル所ニアラズ。其制宜ヲ得レバ、即以テ国家ヲ藩屏シ、人民激變ノ関防ト爲リ、以テ国家長久ノ基礎ト爲ルアリ。若シ其宜ヲ得ザレバ、人民見テ以テ無用ノ長物ト爲スノミナラズ、其波及スル所、終ニ以テ帝室ヲシテ孤立セシメ、或ハ併セテ之ヲ蔑如スルニ至ルモ計ルベカラズ。<sup>(6)</sup>

ここでは明確に、「皇室の藩屏」の具体的役割は「人民激變」の防波堤になるということが述べられている。民衆は放置しておけば、どのような變革を目指すかもしれない。そのような「激變」の防波堤になることこそが、「貴族名門」の役割である。ここには、一君万民主義的な平等主義とは異質の思想を見出すことができるであらう。しかし、どのようにしたら「人民激變」の防波堤になることができるのであろうか。ここで述べられているのはただ、「其制宜ヲ得レバ」というだけにすぎないのである。結局、「皇室の藩屏論」

は華族の社会的ありかたの骨格を示すことができるにすぎないのである。政治的中心としての天皇と人民の間にある、中間者的な存在が華族である。「貴族ハ君主ト平民トノ中間ニ立チ双方ノ調和ヲ媒介スベキ地位ヲ占メ」るのである。<sup>(7)</sup>

## (二) 職分論的華族論

華族という一種の社会階層に職分論を適應したのが、ここである。職分論的華族論である。このような華族の職分論の背景には、武士の職分論があるであらう。武士の職分論については園田英弘「郡県の武士―武士身分解体に関する一考察―」(『西洋化の構造』所収)において詳しく触れたので、ここでは繰り返さないが、幕末維新期には武士の身分的秩序の破壊に、武士の職分論が大きく貢献したことは強調しておきたい。特に維新时期においては、武士は「身分」としてよりも、武士の「職分」の遂行者として位置付けられていたが、このような時代の風潮が武士のみならず「公家」にまで拡大されたところに出てきたのが、職分論的華族論の出発点であつた。しかしながら、このいわば遅れてきた職分論は、武士の場合と異なり、身分秩序の破壊ではなく、新たな身分秩序の形成に貢献するように機能した。

華族の職分論の出発点は、華族の重要な構成メンバーであつた公家に対する、「武家的」な職分の要求より始まったと見なすことが



できる。明治元年正月、太政官は次のような布告を「宮堂上及諸官人」に対して出した。

文武之事業精々勉勵可仕候従前在朝之人々武ハ唯武家之業ニテ於朝廷御用ヒ不被為在事ト存シ一切致廃棄候而已ナラス文芸ニ至リ候テモ固陋拙劣草莽布衣之士ニハ万万不相及徒ニ軟媚之風ヲ喜ヒ上品扨ト称シ華奢風流ヲ專ト致シ候ニヨリ万朝婦人之如ク遂ニ紀綱衰弛皇道陵夷ニ至リ候段実以可愧可歎之至リニ候向後読書撃劍ヲ始メ文武ノ大道ニ至リ且夕講究可仕精熟ノ上ハ応其材夫々御登庸可被為在思召ニ候間無懈怠可心掛候<sup>(1)</sup>

この布告は、「公家」の一種の「武家化」を目的としたものである。「宮堂上及諸官人」に「文武ノ大道」を要求し、その上で修業に応じた人材の登用を述べているからである。このようなロジックが武士に対するものと、そっくりなのは容易に理解できるであろう。武士の「職分」の徹底化とそれに対応した人材のセレクトションは、幕末期のいわば決まり文句であった。そして、武士の職分の要求が強く危機感に裏打ちされていたのと同様に、「公家」に対する職分の要求も、維新という大変革期に際会した「公家」の危機感を背景としていた。危機感を背景としていたからこそ「世襲之旧弊」を捨てて、「官武之差別無之」ように自己変革を願っていたのである。

しかし、「公家」は「武家」になれるであらうか。

明治二年、「官武一途」を企図して「華族」の「称」が創設され

た。これで名目的には、「公家」と「武家」（大名）の一体化が図られたことになるが、ここで考えられなければならないのは、「公家」と「武家」の実態である。「公家」は、長らく中央の政治権力から離れており、政治的支配と無関係な存在であった。「公家」が持つのは文化的威信だけであった。また武士社会の頂点に立つ大名は、形式的には政治的支配の中心的存在者であったが、大名個人が政治的支配の実行者であったかどうか極めて疑わしい。福沢諭吉は大名のことを次のようにのべている。「所謂大名にして、十中の七、八、無学無識、心身共に薄弱にして言行常なく内行修まらず、放奢淫逸、甚だしきは菽麦を弁へざる白痴さえも少なからず<sup>(2)</sup>。また、津田真道は言う。「大凡深宮ニ成長シ甚ダ事情ニ迂闊ニシテ智識ノ如キハ尤其短所ナリ<sup>(3)</sup>」。

明治期になって、大名のこのような社会的な無能を厳しく指摘している文章が見られるのは、それは官僚制化した武士の社会の頂点にいわばシンボリックに位置する大名が大半で、大名個人は実質的には政治的支配の実行者ではなかったばかりでなく、世間から遠ざけられた社会的無能力の存在であったことを物語っている。もちろん例外的には名君といわれる、藩の政治の有能な指導者が出たが、それらはあくまで例外的存在であって、大半の凡庸な大名たちは政治支配を実行するために必要な世事に疎く、藩の政治のシンボリック存在に終わったといふべきであらう。

このような「公家」と「武家」という両者が、「華族」という新たな階層を形成することになったのである。政治権力の実質は、明治政府になってからは官僚層に握られており、「華族」は政治的には形式的にも、実質的にも無能力であった。しかしながら、社会階層的な観点からすれば、事態は異なっている。「華族」は「士族」や「平民」の上位の、階層序列でいけば最高の地位に位置することになったのである。政治的な無能者と、社会階層秩序の最高者というこの両者の断絶は大きかったが、この社会的地位の非一貫ともいうべき状態を克服するためには、階層的秩序に政治的・社会的地位を近付ける必要があった。そのためには、「華族」が政治的・社会的有用な存在者に名目的にも、実質的にもなる以外にはなかった。華族の職分論の意義は、ここにあった。明治四年に出された勅諭は、具体的には「目ヲ宇内開化ノ形勢ニ着ケ、有用ノ業ヲ修メ、或ハ外国ヘ留学シ、実地ノ学ヲ講ズル」ことを述べたものだが、華族独自の役割を明確にすることには失敗している。

朕惟フニ宇内列国開化富強ノ称アル者、皆其国民勤勉ノ力ニ由ラザルナシ。而シテ、国民ノ能ク智ヲ開キ、才ヲ研キ、勤勉ノ力ヲ致ス者ハ、固リ其国民タルノ本分ヲ尽スモノナリ。……特ニ華族ハ国民中貴重ノ地位ニ居リ、衆庶ノ属目スル所ナレバ、其履行固リ標準トナリ、一層勤勉ノ力ヲ致シ、率先シテ之ヲ鼓舞セザルベケンヤ。<sup>(4)</sup>

ここでは、国民一般の「本分」と華族のそれとは、根本的な違いは無いことになっている。ただ異なっているのは、華族が国民の中で「貴重ナ地位」にあり、そのために華族は国民の努力の「標準」になっているとされるところである。華族は、国民と質的に異なる役割を持っているからこそ、国民一般と異なる「華族」ではないのか。それが、普通の国民と質的には同じ役割を与えられ、たんなる「標準」となってしまったり、階層的秩序の最高位に在る意義が無くなってしまっているのではないか。しかしながら、逆にこのことを考える時、事態は一層深刻である。意志薄弱で、世間知らずで、無能の者が多いとされた「華族」が、国民の「本分」の「標準」にならないければならないとしたら、事態は深刻さを通り越して滑稽ですらある。

華族とは国家の用具として、士族や平民などの国民一般とははっきりと区別された貴族でなければならない。ここで、武士の職分論のことを考えてみよう。武士に武士の職分の遂行を強く要求することとは、武士の身分解体の第一歩になったが、それだけでは身分解体には不十分であった。武士は武士の職分を十分に遂行できる能力を持たねばならないと同時に、武士以外の者でも武士の職分の遂行能力があれば、それは新しい意味での武士であるとしたところに、身分制動搖の根本があった。さらに、武士身分のメンバーでも、武士の職分の遂行能力を持たない者は、新しい意味での武士ではないと

された。武士身分の解体は、このようなロジックの延長上に達成されたが、それは武士身分以外にも武士の職分を解放するということがあった。

華族の職分を人民と同じにしたら、武士身分の解体の場合と同様に、華族にとっては極めて危険なロジックがでてくる可能性があった。国民の「本分」を、現実の華族以上に遂行できる者がいて、その者が国民の「標準」になることができるとしたら、それは新しい意味での華族たり得るのではないか。この点については、後ほど華族の活性化を論じる箇所で詳しく論じたい。ともあれ、出された勅諭がどのような論理構成になっていようと、現実には国民一般に拡大されるのではなく、「華族」とは「公家」と「大名」の合体した特権身分でなければならなかった。そして、「華族」を社会の中に安定して位置付けるためには、華族にだけ通用する、特別の存在理由（職分）が必要であった。そのためには、外国の貴族に具体的事例を求める方法が用いられることになった。

明治七年、華族会議開催の届け出が東京府に提出された。それまで華族は、「華族」の「称」を得たが、実質的にはなんの政治的・社会的役割も果たしてこなかった。このような状態を脱して、もっと積極的に華族の在り方を研究する必要があると感ぜられ、華族会議と華族会館の設立が構想されたのである。

夫華族ハ国民中ノ貴重ノ地位ニ居リ、坐ナガラ爵禄ヲ辱シ、無

比ノ聖恩ヲ荷フ。コレ何ノ故ヲ以テ然ルヤ。其然ル所以ヲ知ラザルベカラズ。西洋文明ノ諸国ニ於テモ亦貴族アリ。殊ニ英國ノ如キハ、許多ノ貴族アリテ諸科ノ學術ヲ研窮シ「パルレメント」(議事院)ニ会同シ、立法ノ權ヲ分有シ、上ハ王室ヲ翼戴シ、下ハ万民ノ自由ヲ保護シ、國ヲ振起スル、皆貴族ノ職務タリ。此職アルガ故ニ、帝王ノ寵遇ヲ受ルモ当レリト言フベシ。

ここでは、イギリスの貴族が華族のモデルになっている。イギリスの貴族が、議院の上院に参集し、立法権の行使に参画し、王室を支え、国民の自由の権利を保護する仕事に邁進しており、立派に貴族の「職務」を果たしている。これに対して「現今我國華族ノ如キ、概シテ言ヘバ皆徒手素餐、毫モ國家ニ裨益アルコトナシ」という状態であった。

このような現状を打破するために、「書籍館」を造り、「博学多識実着有名ノ人」を集めて學術の研究を行い、「華族ノ責任トスベキ事」を明確にするのだというのである。ここでは華族の職分が明確にされているわけではないが、華族固有の職分が明確にされるべきだとする自覚があった。しかしながらそれは、「華族」の過去の伝統から導き出されるのではなく、新たに研究して、特に外国の貴族のケースを研究して、しかる後に見出さなければならぬ「職分」であった。「公家」も「武家」も過去を捨てて、新たに自分らの共通の社会的役割を見出さなければならなかった。日本の新たな貴族

階級としての華族の、階層としての結集化が始まろうとしていた。

しかしながら、意図的に新しい自分らの職分を見出すということは、簡単なことではなかった。下手をすれば、実態のない空中の楼阁を築くことになりかねない。このことは、特に外国の貴族をモデルに自分達の職分を模索するときに生じやすい恐れであった。外国の貴族のどのような部分に着目するかによって、望ましいとされる職分は大きく異なってくる。先の引用では、議会上院で果たす貴族の役割が注目されているが、ヨーロッパの貴族の社会的役割・特権はまだ多様であった。政治・外交・司法・行政・軍事など様々な分野で、貴族は大きな力を持っていた。明治十五年の「華族タル者率先シテ軍人トナラザルベカラズ」とした取調書は、このような点に関して非常に興味深い内容を持っていた。<sup>6)</sup>

取調書は、一方では封建制の解体により、封建的「特権ノ解除」がもたらされ「其門閥タリ名流タル如キハ、只其歴史上ニ於テ先祖ノ栄光ヲ示スニ過ギザルノミ」としながら、他方においてはそれにもかかわらず「華族ハ、公武ヲ論ゼズ、閥閥ノ故ヲ以テ、其秩序ハ社会ノ上ニ在テ、上流ヲ占メ」ていると説く。華族は昔は「主権者族」であって、普通の人民とは「権限」を大いに異にしていたが、現在では「其常職ヲ解」かれ国民一般と同じになってしまった。しかしそれにもかかわらず、階層秩序の上では社会の「上流」を占めている。この落差を埋めるためには、どのようにしたらよいであろ

うか。たんなる特権によって、社会に重きを占めるのは過去のものであり、現在では「職業」がこれに変わったという。それを一般化して、次のようにのべている。

欧州各国ニ於ル、古ノ族ハ人ヲ以テ成リ、今ノ族ハ職業ヲ以テ成ル。古ノ族ハ姓氏ニ基ヅキ、今ノ族ハ業体ニ基ク。社会分勞ノ大法絶ヘザルノ間ハ、種族モ亦尽キズ、唯其基ク所ノ異ナルノミ。

わが国においても、「種族ヲ論ゼズ、志ヲ立テ、以テ国家ニ報酬セント欲スル者、社会分勞ノ大法ニ基ヅキ、職業ニ従事シ、有用ノ人ヲラザルベカラズ」とされた。このような社会分業に則り、その職業の難易度や貴賤によって社会的地位（社会ノ品流）を決め、それに基づいて階層（種族）を分かつのだというのである。ここでは、職能的階層論が述べられていると見なすことができるであろう。華族は、より困難な、より社会的地位の高い職能階層になることによって、「上流」の社会的特権的地位を占めるようにと構想されているのである。そうして、その結果選ばれたのが、軍人という「職業」であった。その論拠は、「華族ハ総テ武勲ヲ以テ家ヲ興セシ者」というところにあつたのである。

このような意見が出てきた背景には、この文章のモデルになっていると思われるドイツにおいて貴族（ユンカー）が軍隊に大きな影響力を持っているという、実態があつたであろう。一八七二（明治

五) 年の段階で、ドイツの高級将校の九十四パーセントが貴族によって占められていた。<sup>(7)</sup> しかしながら、これはあくまでドイツの貴族の事例である。「武家」が「武勲」によって家を興したものと見なすことができたとしても、「公家」の場合はどうであらうか。また、「武家」華族の場合でも、歴史的にはそのようなことが言えたとしても、明治の時点で彼等がどれだけ軍人にふさわしいかは、極めて疑問であった。

福沢諭吉も「華族を奨励して兵事の氣風を養ふの策」を提案しているが、机上の空論とすべきものである。<sup>(8)</sup> 福沢の提案に対する反論で、ある論者は華族の置かれた立場を非常に正確に次のように述べている。「華族トイエドモ、今日ニ至リテハ、別ニ文武ノ常職ヲ帶ブル者ニ非ズシテ、其特典ヲ有スルモノハ、唯其位地ニ對スルノ厚遇優待タルニ過ギズ」。<sup>(9)</sup> 華族は文官や武官の職分を持たない。彼等がただ持っているのは、社会階層上の高い地位だけである。したがって、その職分にはない者が軍人になるために優遇されるのは、筋が通らないと考えられたのである。

結局、「華族タル者、率先シテ軍人トナラザルベカラズ」とした取調書は、華族が階層秩序の最上層にいるにもかかわらず、それにふさわしい職分が見出せないとした問題意識は正しかったものの、それに具体的な正しい答えを与えるのには失敗したと見なすべきであらう。特権ではなく、職業こそが、階層の決定に重要だとした点

も正しかった。しかし華族には、その階層的地位にふさわしい職業とは残されているのであらうか。華族が軍人になることに關しては、実は大きな障害があった。

明治十四年に、少壮の者はなるべく陸海軍に従事するように「諭達」されたが、ごくわずかの者しかこの「諭達」を実行しなかった。それは、たとえそのような志をもっていたとしても、「士官学校試験ノ方厳ニシテ、繁雜ノ科目悉ク習熟スル能ハズト思考スルヨリ、十二八九ハ逡巡致シ候姿ニ相見候」からであつた。<sup>(10)</sup> 軍人の世界は、明治三年の段階からすでに「方厳」な試験が必要な世界であつた。言い換えれば華族の世襲の特権が侵入しにくい世界であつた。明治の十年の段階では、軍人に限らず、官僚の世界では「官ハ以テ賢能ヲ挙用」<sup>(11)</sup> することが原則的に認められるようになっていた。

このことの意味は重大である。国家にとって重要な役職は、海外の貴族がどのようなであらうとも、日本では華族の特権として認められないということである。そうすると、国家に重要な職分につくことによって、国家に貢献し、そのことによって、華族の高い階層的地位を占めようとする、職分論的華族論は大きな限界に逢着することになるであらう。華族に相応しいと思われる職分を模索しようにも、現実可能性のある、重要な職分は国家官僚が独占しているという事実がそれである。

明治二年から、華族制度の完成を見る十七年まで、華族は自分ら



の可能性をさまざまに模索してきたが、その背後にあったのは、急速に整備されていた官僚制と、官僚のプロフェッショナルリゼーションであった。十九世紀のヨーロッパの貴族は、制度上あるいは制度の運用によって、様々な貴族特権を、軍人や官僚の世界にもっていた。ところが、日本では武士出身者で官職の保有者が軍人や官僚の地位を独占しており、これらの世界に華族が特権を持つ余地はほとんどなかった。すなわち、この分野で職分論的華族論が成り立つことができなかったということである。

職分論的な華族論が大きな意味を持っていたのは、華族の活性化を論じた部分であろう。職分論は、職分を遂行することを強調するので、暗黙のうちに功労主義や能力主義的色彩の強い主張を含んでいる。

英国ノ貴族ガ始終其元氣ヲ保チ恒ニ活動シテ国家ノ柱石トナリシ所以ハ全ク此腐敗予防ノ法アルニ由ナリ即チ英国ニ於テハ国家ニ功勞アル宰相將軍等又ハ博學多才ニシテ其地位資財一世ニ卓越スル者等ハ之ヲ貴族ニ列シ又旧来ノ貴族ノ資格ヲ失ヘル者之ヲ貶シテ庶人ト為スノ制アリ<sup>(12)</sup>

「国家ニ功勞」ある貴族だけが貴族に相応しいというのは、貴族は貴族の職分を果たし「国家ノ柱石」とならなければならないとする立場である。このような貴族の「新陳代謝ノ方法」が重要だとしての意見は、様々なかたちで見ることができる。「現今存在セル五百戸

許ノ華族ヲ永久ニ存続セシムルヲ必要ナリト為サズ、之ヲ換フルニ国家ニ功勞アル者ヲ以テスルヲ望ム<sup>(13)</sup>」。「自ラ一家ノ財産ヲスラ守ル能ハザル如キ華族ハ、国家ノ為メニ何ノ効功ヲ為ス有ラン。腐敗華族ハ自然ノ淘汰ニ委シ、国家ニ功勞アル者ヲ挙ゲテ新タニ華族ニ叙ス可キナリ<sup>(14)</sup>」。このような主張が武士身分の解体の時にも、数多く見られたが、これはその華族版とでもいうべきものであった。しかし、国家への功勞と漠然といったとしても、華族の職分が明確でない以上、その自然淘汰は思うにまかせなかったといふべきであろう。

華族は、このように職分論的観点からすると、上流階層という社会的地位と財産維持など自己の存続を計る以外は、あくまでその社会的任務は明確ではなかったのである。これこそが「皇室の藩屏」論でいう、華族は存在そのものが重要なものであって、何をなすかは第二義的だということの実質であった。結局このような背景のもとに、明治十七年の華族令では、例えば公爵ならば（一）「親王諸王ヨリ臣位ニ列セラルル者」（二）旧撰家（三）徳川宗家と家格主義に基づくものがきて、最後に（四）「国家ニ偉勲アル者」がきた。以下、侯爵・伯爵・子爵・男爵とも、公爵の場合と同様に家格主義と国家功勞主義の合体でなされていた。国家に功勞ある者を、大きく強調すると華族の自然淘汰論につながっていくのであるが、華族令が発足した時点においては、上流社会内での家格主義が骨格的な原則となっていたのである。



### (三) 展望

華族に残されたのは、日本が、天皇を中心とする立憲君主国になるという点であった。明治八年に、漸次立憲政体を立てるとの詔勅が出されて以来、立憲政体が日本で具体的にどのような姿をとるか種々議論がなされてきたが、明らかなことは、立憲政体とは具体的には、立憲「君主制」のことであった。天皇という絶対的な存在を否定する者は、過激な自由民権論者でもほとんどいなかった。

君主制とは、君主による政治的主権の世襲制である。天皇という最高の家格の存在による権力の世襲が絶対視されているという前提に立てば、その周囲にある「公家」や「武家」の家柄・家格もトータルに否定できないことは当然のことであった。このような性格の政治権力を、一般国民の前に裸にしておくことはできず、中間に両者の媒介者が必要なことは、すでに「皇室の藩屏」論の箇所述べた。「立憲君主制」ハ君主制貴族制民主制ヲ合一シテ其長所ヲ取其短所ヲ除キタルモノニシテ若シ貴族ヲ關クトキハ立憲政体ノ美ヲ完成スルコト能ハ<sup>(1)</sup>ずと、考えられたのである。

この立憲君主制に相應しい貴族制とはどのようなものであろうか。このことを考えるためには、君主制を支える権力層の性格を明確にしておく必要がある。明治のこの時期には、世襲の特権に裏打ちされていらない国家官僚層の手に権力は握られていた。私は以前この官

僚層を「郡県の武士」と呼んだが、武士身分を解体したのもこの層であった。彼らは天皇を頂点とする権力構造を築き上げたが、天皇という世襲の権力とそれを支える世襲によらない権力層の性格との矛盾をどのように処理するかが、大きな課題であった。

彼等は一方において、天皇の絶対性を高めていきながら、他方で世襲の特権が華族層にまで拡大するのを阻止し続けた。しかし、君主制は君主が孤立して存続しがたいという認識があった。そのために、華族の世襲の特権に対してはできるだけ少なくし、同時にその社会的地位だけを高く保つという事でこの要請に対処したのである。そしてその結果できたのが、華族制度であった。華族は社会の「上流」を占めていたが、権力らしい権力とは無縁であった。立法における上院の権力のみを分有し、しかも階層的には社会の「上流」を占めている存在、それは権力と高い社会的威信の分離ということを意味していた。華族制度は、非常に明確な家格主義で貫かれているが、それは権力から分離された家格主義であったからこそ、認められたのである。

そしてこの権力と社会的威信の分離は、戦前期の日本の階層構造に大きな影響を持つことになる。華族は高い社会的地位を維持しながら、権力とは切り離されていたということは、華族が一種の有閑階級に近い存在になったということである。彼らは、その高い社会的威信を利用して、たぶん名譽的な色彩の強い社会活動に邁進し

ていった。華族会館での講演をまとめた稻垣満次郎の『貴族論<sup>(2)</sup>』や金子堅太郎の『貴族論<sup>(3)</sup>』は、イギリスの貴族のケースを中心として、名望家的活動の重要性を強調している。国会開設後に出版されたこれらの本は、華族のより実態に近いところで論をたてねばならなかったに違いない。しかし、土地貴族のイギリスと国家貴族制ともいふべき日本の華族では、そもそも比較検討することに無理があったとすべきではなからうか。社会的実力を背景としたイギリス貴族と、国家の必要性によって非常に人為的に作られた日本の華族とは、その力が社会に浸透できる度合いに決定的な違いがあったというべきであろう。

このような両者の違いは、それらが他の階級に及ぼす影響力の差異ともなっており現れている。日本では華族が作り上げていくことになる上流階級の文化は、中流層の階層文化と大きな断絶をしている。大土地所有制に基盤をおくイギリスの貴族は、中流層以下の階層にとつて、望ましい生活のモデルを提供することになった。一方日本では、社会にではなく国家にその存立の基盤をもつ国家貴族である華族は、その影響力を社会に拡散させていく足場をわずかしかなかった。そのため、小さく自己完結的に形成されたのが華族文化であった。それは、華族が人工的に他の階層と断絶することによって自己のアイデンティティを保っているかのようにみえるのである。

## 注

- (一) 「皇室の藩屏」論
- (1) 園田英弘『西洋化の構造——黒船・武士・国家——』思文閣出版、一九九三年、一七六ページ。
- (2) 遠山茂樹編『日本近代思想大系2、天皇と華族』岩波書店、一九八八年、三五二ページ。
- (3) 同右、三五五ページ。
- (4) 同右、三五七ページ。
- (5) 板垣退助『二代華族論』忠誠堂、大正八年。
- (6) 遠山茂樹編、前掲書、三九〇ページ。
- (7) 中根重一等訳編『貴族特権』（出版されたものかどうか分からない）七ページ。
- (二) 職分論的華族論
- (1) 『法令全書』第1巻、一二二ページ。
- (2) 『福沢諭吉集』（明治文学全集8、筑摩書房）一五四ページ。
- (3) 『明治啓蒙思想集』（明治文学全集3、筑摩書房）一二四ページ。
- (4) 遠山茂樹編、前掲書、三二三ページ。
- (5) 同右、三二四—三二五ページ。
- (6) 同右、三三二—三三七ページ。
- (7) 園田英弘、前掲書、一二三ページ。
- (8) 遠山茂樹編、前掲書、三六五ページ。

- (9) 同右、三七五ページ。
- (10) 同右、三三八ページ。
- (11) 霞会館編『華族会館史』、昭和四十一年、一九〇ページ。
- (12) 中根重一等編訳、前掲書、一〇一一ページ。
- (13) 遠山茂樹編、前掲書、四三八ページ。
- (14) 同右、四三二ページ。
- (三) 展望
- (1) 中根重一等編訳、前掲書、九ページ。
- (2) 稲垣満次郎『貴族論』明治二十四年。
- (3) 金子堅太郎『貴族論』明治三十二年。